日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

長期入院精神障がい者の地域との再統合をめざした課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 焼山, 和憲, 石飛, マリコ, 黒髪, 恵, 内野, 隆幸, 福原, 百合, 伊岐, 隆, 川上, 孝徳 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/572

長期入院精神障がい者の地域との再統合をめざした課題

福岡県　福岡大学医学部看護学科[1)]　福岡県　医療法人緑心会福岡保養院[2)]
福岡県　医療法人慈光会若久病院[3)]　福岡県　特定医療法人社団相和会中村病院[4)]
福岡県　医療法人泯江堂油山病院[5)]
焼山和憲[1)]　○石飛マリコ[1)]　黒髪　恵[1)]　内野隆幸[2)]
福原百合[3)]　伊岐　隆[4)]　川上孝徳[5)]

Key Words

精神障がい者　地域　再統合

はじめに

長期入院精神障がい者の地域との再統合を推進するには，安心して生活するための地域の受け皿と当事者の意志が重要な課題となる。先行研究では，社会参加には当事者の存在を受け入れられること，障害を理解されること，他者に役に立つおよび経済的な安定があることが示唆されている[1)]。一方では，当事者の地域との再統合には自尊心の問題，病気の受容や開示が影響したり[2)]，退院後に地域で生活していくには，家族の受け入れと住環境の確保の困難さも伺えている[3)]。今回，長期入院精神障がい者に対してアンケート調査を行い，精神障がい者が地域との再統合をめざすための課題を検討したので報告する。

用語の定義

再統合とは，精神障がい者が病気によって一時的に離れていた「家族」「職場」「学校」「地域」その他の社会集団などの環境の中に復帰順応し，個人の役割を取り戻すだけでなく改善することとした。

Ⅰ．研究方法

1．調査対象

県内の４つの精神医療施設で１年以上におよぶ入院加療を受けている障がい者で，ICD-10に分類される「精神および行動の障害」のいずれかの疾患を有する直筆可能な男性63名（平均年齢58.4歳，SD12.5），女性37名（平均年齢58歳，SD11.6），計100名である。

2．調査方法・期間

福岡大学の医の倫理委員会および施設の倫理審査に従い，病名や個人情報を特定できない無記名方法で，回答用紙の提出で同意があったとみなす留め置き直筆法で行った。

調査期間は，2009年２～９月である。

3．調査内容および解析

調査内容は，先行研究[4)]「精神障がい者との社会的距離の調査」に踏襲したもので，「退院後に望むケア」１～４群，「社会での生活」８項目に関する個人の考えを問う（④賛成～①反対）内容および自己像評価17項目のSD法による７段階評定である。データの解析は，マイクロソフト社の表計算ソフトEXCEL2007で簡易プログラムを作成し基本統計およびＭ×Ｎ表の検定および調整化残差の計測を行った。

Ⅱ．結果

男女の退院後に望むケアは「１群：病院支援・在宅ケア」男性15名（24%），女性14名（38%），「２群：地域支援・在宅ケア」では男性５名（8%），女性６名（16%），「３群：病院支援・地域支援・在宅ケア」では男性16名（25%），女性６名（16%），「４群：入院治療」では男性18名（29%），女性９名（24%）および「５群：その他」では男性９名（14%），女性２名（6%）であった。男性は４群が多く，ついで１群が多かった。女性では１群が多く，ついで４群が多く相反していた。社会での生活は，Ｍ×Ｎ表の検定で④賛成～①反対の調整化残差を計測し有意差は１群項目２，２群項目５・６で認められたが，対象者が少ないため統計学上の有意差は疑義と思われた。１～４各群および集約データによる再検定でも男女間に有意差はなく，同傾向の回答であった。自己像評価

は表1に示した。

表1　精神障がい者の自己像評価

項目	患者平均 [SD]
1．親しみやすい	4.78[1.77]
2．なごやかな雰囲気になる	4.71[1.69]
3．側にいるとくつろぐ	4.68[1.71]
4．安全	5.20[1.49]
5．安心する	5.06[1.44]
6．信用できる	5.22[1.64]
7．責任ある	5.32[1.48]
8．好き	4.86[1.65]
9．人が良い	5.51[1.37]
10．温かい	5.25[1.35]
11．親切	5.25[1.45]
12．意志が強い	4.64[1.87]
13．気の大きい	4.52[1.83]
14．気が楽になる	4.80[1.55]
15．活発である	4.61[1.73]
16．敏感である	4.94[1.77]
17．穏やか	5.07[1.56]
合計（平均）	84.42（4.96）

Ⅲ．考察

退院後に望むケアでは，男性は「病院での治療」が多く，女性では「病院から支援を受けながら在宅ケア」が多い。社会での生活は，社会復帰施設の建設，アパートを借りる，就職，地域の奉仕活動に参加するおよび職場の人と協力できるに賛成が多く，地域との再統合を希望しているようである。男性に家やアパートを借りることに賛成が多いのは，将来を見据えて，家族との同居が困難にあると思っているからではないだろうか。家族などの受け皿の検討はできないが，地域での生活基盤（住居･仕事など）が整い，病院支援があれば，再統合は可能ではないだろうか。女性に，家を借りることに反対が多いのは，退院後に帰る家があるためと思われる。そのため，病院支援で在宅ケアと働く場を確保できれば，再統合は可能と思われる。就職が男女ともに賛成が多いのは，生活の場として在宅を想定し，経済基盤として働く場を求めている[5]と思われる。

地域の奉仕活動に参加するに賛成が多いのは，地域で生活するうえで，近隣との人間関係を形成することの大切さを感じての回答と思われ，２群と３群の地域支援の希望を合わせると33％あることからも頷ける。

男女ともに親戚や身内の者が同じ障がい者と交際・結婚することに反対するが多いのは，障害を抱えて家族を養うこと，さらに社会のなかで自立して生計を立て，結婚する相手とかかわりながら生活していくことの自信のなさなどの不安[6]が投影されているのと思われる。

自己像評価は中得点群で，全体平均4.9ポイント「ややそう思う」である。特に，親しみにくい，一緒にいると寛げない，暗い，意志が弱い，気が小さい，活発でないおよび鈍感といった自分に対する自信の弱さを見受ける。社会参加に関連する要因は，仕事や活動環境の整備も大きな課題だが，それに加えて「自尊心の問題」が社会参加に大きく影響される[7]ように「自己否定感」をなくす支援が重要であると考える。

Ⅵ．結論

長期入院精神障がい者の地域との再統合をめざした課題は以下の通りである。

１．男性は，地域での生活基盤（住居･仕事など）が整い，病院支援があれば，地域との再統合が可能になると思われる。

２．女性は，在宅に生活基盤を置き，病院支援を受けながら，就職する機会があれば，地域との再統合が可能になると思われる。そのために，自立するための自信を強めることである。

３．身内の者が，同じ障害を持つ者と交際や結婚することを反対しているが，男女ともに生活基盤の確立ができれば，将来に向けた希望に繋がると思われる。

引用・参考文献

１）嶋澤順子：在宅精神障害者と近隣住民の相互の交流に関する看護援助方法，千葉看護学会会誌，６（２），ｐ62 - 68，2000.
２）柴田文江，天谷真奈美，大塚真揚：精神に障害を持って地域で暮らす人々の社会参加意識や生活行動に影響を及ぼす要因，日本病院・地域精神医学会誌，47（２），ｐ178 - 180，2004.
３）高木健志，笹川拓也：退院後の生活に関する一考察，川崎医療福祉学会誌，14（１），ｐ157 - 159，2004.
４）焼山和憲，伊藤直子，石井美紀代他：精神障害者に対する地域住民の社会的距離に関する研究，西南女学院大学紀要，７，ｐ７ - 18，2003.
５）東保みづ枝，森長静江，松尾佳子他：精神障害者の社会参加ニーズ調査 - 特に本人，家族，スタッフの三者の視点の異同について，日本社会精神医学会雑誌，８（２），ｐ113 - 129，1999.
６）今岡雅史：精神分裂病者同士の結婚について，日本病院・地域精神医学会誌，44（２），ｐ229 - 235，2001.
７）前掲書２），ｐ62 - 64.
８）Ｓ．アリエティ，近藤喬一訳：アリエティ分裂病入門，星和書店，1980.